

1. 背景とねらい

「いわて21」は、「ササニシキ」に放射線を照射して生じた突然変異集団より選抜・固定を図った系統である。強稈・多収・良質であり、かつ耐病性・耐冷性に優れることから昭和62年3月に準奨励品種として編入された。

出穂期が「アキヒカリ」・「たかねみのり」よりやや早い早生の早に属することから、これらの品種の不安定地帯への導入が期待されている（県中北部の標高300m以下約2,000ha）。

今回は、本年度まで得られた知見をもとに、施肥法と刈取時期を中心に安定栽培のための栽培法について指導上の参考に供する。

2. 技術内容

（1）施肥法

ア．基肥 基肥は、「アキヒカリ」並とする。「たかねみのり」並の施肥量では、生育量が不足するので注意する。

イ．追肥 追肥は、幼穂形成期に重点をおく。分けつ期の追肥は通常分けつ期追肥を実施している地域のみとする。

追肥時期	分けつ期	幼穂形成期	減数分裂期
効 果	△	○	△

○重 点
△地域性

（2）刈取時期と品質

刈取適期は、出穂後の積算気温（平均気温）で950℃～1050℃の範囲である。

籾の黄化はやや緩慢であるが、積算気温が950℃になると整粒歩合がほぼ80%になる。また、1050℃を越えると被害粒（特に茶米）が急に増加するので、刈遅れにならないように注意する。

（3）玄米調製ふるい目

「いわて21」は「ハヤニシキ」や「たかねみのり」に比較して玄米千粒重が小さいので、玄米調製のふるい目は、1.85mmを用いる。ただし、年次により登熟が悪く、未熟粒の混入が多い場合は1.9mmのふるい目を使用する。

3. 指導上の留意事項

（1）苗の葉身は、「アキヒカリ」・「ハヤニシキ」より伸びやすいので、葉身を伸ばしすぎないように適正な管理を行う。

（2）熟期は「ハヤニシキ」と「アキヒカリ」の間であるが、北部・北上川上流地帯

の山間部では、中苗や成苗などの葉齡増加苗を用い出穂の促進を図る。

(3) m^2 当り穂数が確保しやすく穂数増による登熟低下が懸念されるので中干し・間断かんがいなどで根の健全化に務め登熟向上を図る。

(4) 多肥で多収となるが減数分裂期以後の多追肥は登熟を遅らせるので注意する。

(5) いもち病抵抗性は、「アキヒカリ」より強いが発病には注意し防除基準により適期防除に務める。

(6) 短稈で茎数・穂数が多くなり易い品種なので、紋枯病の適期防除に務める。

(7) 耐冷性は、「アキヒカリ」より優れているが幼穂形成期～減数分裂期の低温時には深水管理を徹底する。

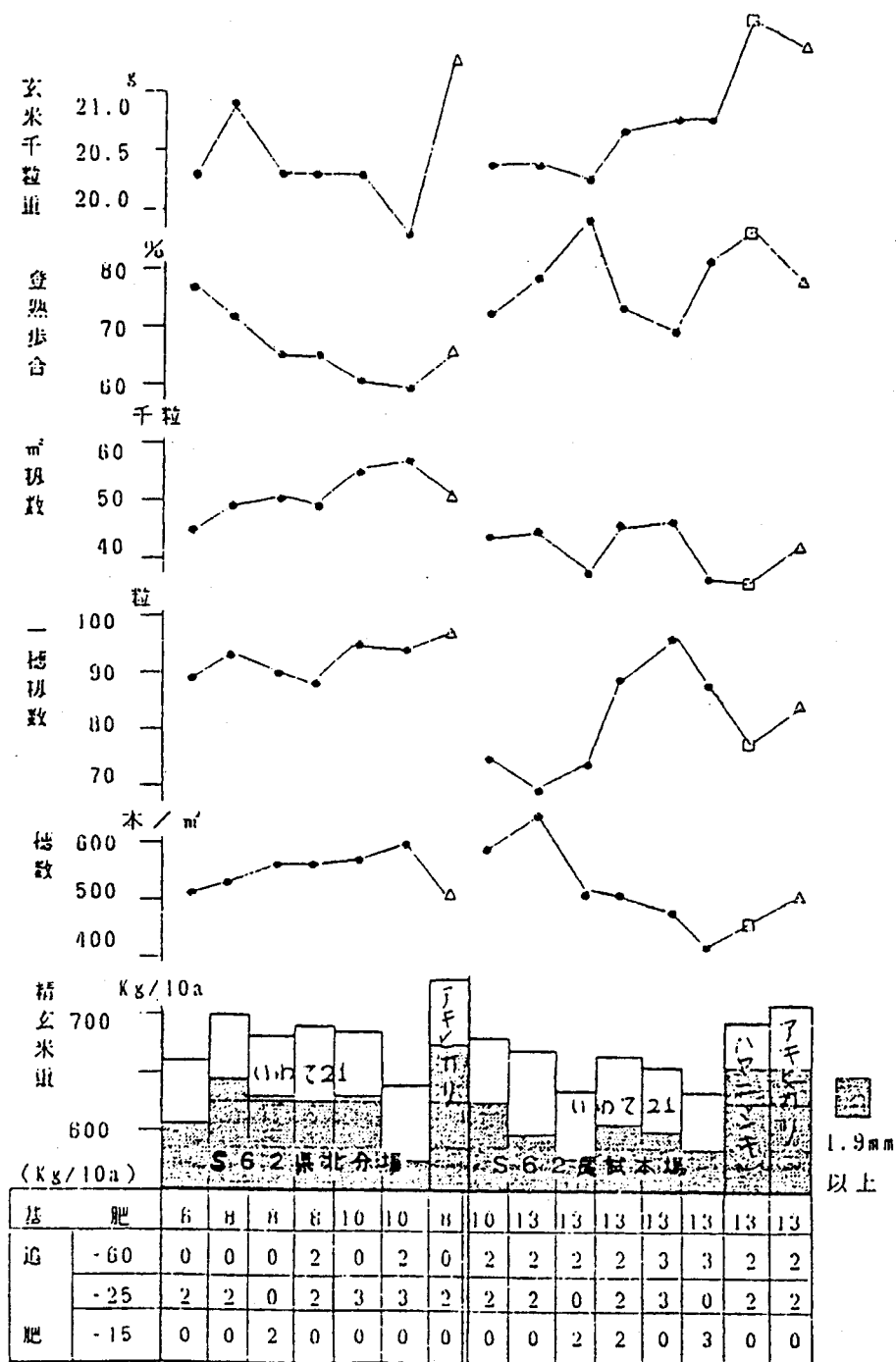


図-1 施肥法と収量・収量構成要素